

アートでかがやくおおいちのまち

近年、全国各地で数多くの「アート・プロジェクト」が展開され、アートを媒介に地域を活性化させようという取り組みが増えています。アートが地域へ浸透するにつれ、それに携わる人たちの活躍の場も広がっています。今回は、大分市在住の画家 北村直登さん、日本政策投資銀行大分事務所副調査役の佐野真紀子さんをゲストにお迎えし、アートを活かしたまちづくりなどについて語っていただきました。

コーディネーター 高嶋和代（フリーアナウンサー）



—— 北村さんは福岡県のご出身で、ブラジルへサッカー留学をしたほどのサッカー少年だったそうですが、絵を描き始めたきっかけについてお聞かせください。

北村 サッカーをやっているときに何が楽しかったかを考えると、経験を積み重ねることがすごく楽しかったんです。ただ、スポーツ選手はどうしても年齢的な限界があります。一生続けられる何かをやってみたくて思った中に「絵」があったんです。昔、母親に絵が上手だと褒められたこともあって、絵を描いてみよう。初めは路上で販売していたんですが、下手で買ってもらえなかった。そんな時、僕の絵を買ってくれたのが大分の人で、何が求められているのかを教えてもらったり、個展に誘ってもらったりして助けられた。その時、僕は「大分の画家」になりたいと思ったんです。

市長 一昨年、「第33回国民文化祭・おおいち2018」「第18回国障害者芸術・文化祭おおいち大会」のリーディング事業として開催した「回遊劇場」ひらく・であうめぐる」には、北村さんにも

参加していただき、大分市の文化・芸術の魅力を全国へ発信することができました。また、昨年8月の大分トリニータ対鹿島アントラーズ戦では、北村さんのデザインしたクラブ創設25周年記念Tシャツが来場者にプレゼントされたこともあって、約2万8千人の観客が昭和電工ドーム大分に来場しました。今日、初めてアトリエにお伺いしましたが、ここでさまざまな作品が生まれているんだと大変感動しています。

—— 最近、市内でもアート作品を鑑賞できる場所が増えてきたと感じますが、いかがですか。

佐野 今まで美術館などの建物の中になかったアートを、箱の外に出したというのが大分市の特徴の一つだと思います。まちなかの至る所にパブリックアート、野外彫刻、ウォールアートといった多様な作品が点在し、まちにやってきた人がたまたまアートの出会って引き込まれることもあるし、作品を鑑賞するうち、「ここにこんなものがあったんだ」という、まちの魅力の新たな気付きや再発見といった面白さが大分市のアートにはあると思います。